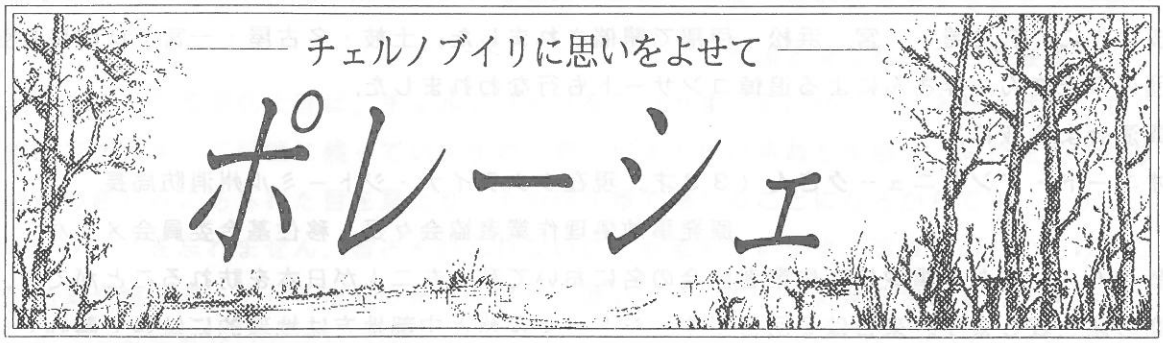
NO. 45. 1998. 5. 31.



私達は、すべての“核実験”に反対します。

「核はもういらない」

パキスタンの核実験に対し、平和を訴えるリボンをつないで抗議する被爆者。修学旅行の愛知県立明海高校の生徒たちも飛び入り参加した＝29日午前10時半、広島市中区の平和記念公園で

インドとパキスタンで、相次いで地下核実験が強行されました。核廃絶を願う全世界の人々に、絶望的な衝撃が走り、一方で、「核拡散防止条約」などにより、核を独占しようとした五大国の目論みが、音を立てて崩れ去りました。

私達「救援・中部」は、すぐに各大使館に抗議の声明文（P11参照）を提出しました。

それにしても、広島・長崎を体験した唯一の被爆国（＝日本）の政府が、『遺憾』の一言で片付けてしまい、核兵器の開発に、断固反対する行動を取れないのは何故なのでしょうか？

それは、日本が屈指の軍事大国であり、また『平和利用の名のもとに進められる原発』から産み出されたウランやプルトニウムが、堂々と核兵器の原料として使用され、核拡散の原動力となっているからです。ウクライナの友人達は、チェルノブイリ原発事故による放射能の被害に苦しみ続けています。原子力の平和利用もまた、人類にとっては、壮大な“核実験”の一つと言えるでしょう。広島、長崎、そしてチェルノブイリの悲劇を繰り返さないために、私達「救援・中部」は、すべての“核実験”に反対します。

〒466－0822　名古屋市昭和区楽園町137　1－10
チェルノブイリ救援・中部　代表：中島しぐれ
郵便振替：00880－7－108610
☎／FAX：052－836－1073（月・水・金　10:30 ～15:30 ）

講演会「チェルノブイリは終わらない…石棺を閉じた男たちは語る」は、４月２４日の土岐市を皮切りに、名古屋・一宮・浜松・伊那で開催されました。土岐・名古屋・一宮では岐阜管弦楽団の平光さん、伴さんによる追悼コンサートも行なわれました。

《講演会より抜粋》

レオニード・アントニュークさん（３９才。現在ウクライナ・ジトーミル州消防局長
原発事故処理作業者協会々長　移住基金委員会メンバー）

皆さん、このたび事故処理作業者協会の名において私たち二人が日本を訪れることができ、感謝の意を表します。来日は２回目です。ジトーミル州と中部地方は地理的には遠く離れていますが、ジトーミルは中部地方の９番目の県だという気がします。

我国は経済危機に陥り、政治家は相互理解がなく、賃金もたびたび遅配になります。正直に言えば時々絶望感がわいてきます。しかし私たちは孤独ではありません。日本の多くの人々に支援されていることが私たちを力づけています。しかし皆さんの救援を頼りにして私たちが何もせずにいるわけではありません。事故処理作業者協会は、主に亡くなった事故処理作業者の遺族や身体障害者を支援し、子ども達を療養所や保養所に送り出しています。

ジトーミル州は事故の最も大きな被害を受け、人口１５０万人の１／３の住民はさまざまな程度で被曝しました。州の１７００の住居地域のうち７３５は汚染地域に含まれていて、３５の村の住民は疎開させられました。汚染地域の９つの地区で消防士たちが活動しています。放射能限界値をはるかに超えている汚染地域での森林火災消火は、やらざるを得ないことなのです。私も汚染地域へたびたび出動しなければなりません。すでに１９８６年５月上旬に放射能を浴びたのでなれてはいます。

ご存じのことと思いますが、大気への放射性物質の噴出を防ぐため、原子炉にはヘリコプターから５０００トンもの砂、鉛などが撒かれ、炉心の残り部分がサプレッションプールに崩れ落ちる危険が生じて、炉心下の重水を早急に汲み出さねばなりませんでした。原発の一部地域では１時間に６００～８００レントゲンに達して、ポンプ車の設置場所では約１００レントゲンでした。私たちは出来るだけ高レベルの放射能の塊を避けながら、プールにつながるトンネルを通り抜けました。大規模な惨事を防ぐために危険を冒さねばならないことを自覚していました。一睡もできないことや放射能にひどく被曝したことにより大変な疲労を感じました。

もし再び同じような状況になれば出動するかと尋ねられるなら、はいと答えます。皆さんは私のことを理解してくれるでしょう。皆さんも核兵器禁止やきれいな環境のために奮闘しているからです。自分の消防士としての仕事は最も危険でありながら、最も人道的なものと私は考えています。炉心下で作業したとき、妻や娘のこと、すべての母子達のことを考えました。私は皆さんを守りました。必要なら再び守ります。

オレグ・トビャンスキーさん（４３才　消防署技術部副部長　事故処理作業者協会の国際交流と薬品購入など医療問題担当）

私たち処理作業消防士達は、チェルノブイリを思い出すことが好きではありません。もちろん詳細でさえすべて記憶に残っていますが、思い出すと再び事故を実感し、同僚を失ったり、母親達の悲しみにあふれた目を見たり、その涙を頬で感じることになるからです。しかし、チェルノブイリを忘れません。皆さんが忘れないことも望んでいます。事故そのものだけでなくその結果や被害者、そして自分の命を捧げた、薄いラバースーツに身を包んで炎に向かった人たちのことを忘れないでほしいのです。

チェルノブイリは全世界規模の惨事です。私たちだけで克服することは永遠に不可能でしょう。そして時間が経つにつれ記憶も薄らいでいます。現在多くの人たちはその恐ろしい日々を忘れていて、チェルノブイリを自分の災害と実感していません。だからこそ、私たちは１万キロ離れている日本の皆さんが、私たちの痛みを分かち合い、決して余っているお金ではないのに援助してくださることに深く感動しています。

チェルノブイリ事故のことは８６年４月２６日の朝、当時私が消防署副部長として出勤したとき、監視室に事故を知らせる電報と消防士全員の臨戦体制移行司令が届きわかりました。５月１０日、チェルノブイリ市に到着したら町の洗浄作業の司令がくだされました。この仕事は昼も夜も休みなく続きました。私たちは８～１０人ずつ消防車か装甲車に乗って原発に行き、コンクリートミキサー車に水を汲み入れてその混合物を配管で原子炉の下へ送り出しました。

自宅へ電話をかけたとき、妻は涙いっぱいで言葉が出ませんでした。彼女は早く戻るように、身体に気をつけるように、「あなたは私たちに必要なの」といいました。それ以来電話をかけることができませんでした。家に残って私たちを待っている人のことを思い、彼らを守るためにできる限りのことをしました。一緒に作業をした多くの人たちはすでに亡くなっています。

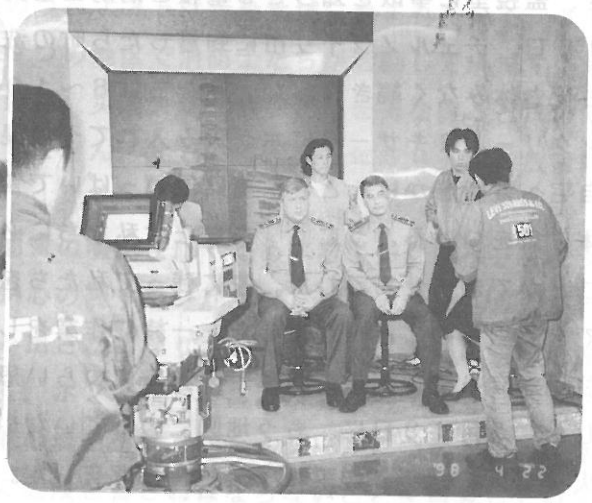
住民が立ち去った村を訪れて、非常につらい思いをしました。５月１３日に、もう地図にのっていないある村の火災消火に行き、作業終了後村を歩きました。住民がいなくて家が空っぽで、猫の群れだけがいました。いきなり消防車に大きな犬が走りよって前足でドアを引っ掻き始めました。私たちは手持ちの食料の一部を分け与えました。犬は人間がどこへ、なぜ去ってしまったのか理解できないのだと思いました。私たちが帰るとき、犬は長い間後ろを追いかけてきました。チェルノブイリは事故の技術的な面だけでなく、人間の災難や膨大な環境的惨事も知らしめました。もし核戦争が起きたらどうなるか、誰も生きて残ることがないでしょう。

現在皆さんの救援のおかげで事故処理作業者協会は会員達に医療、食料の援助や健康診断を行なっています。また無線機、防火衣が購入されました。日本の皆さんに深く感謝しています。

【⇩来日早々、新聞記者団に対して、資料を片手に記者会見をする二人（4/20）】

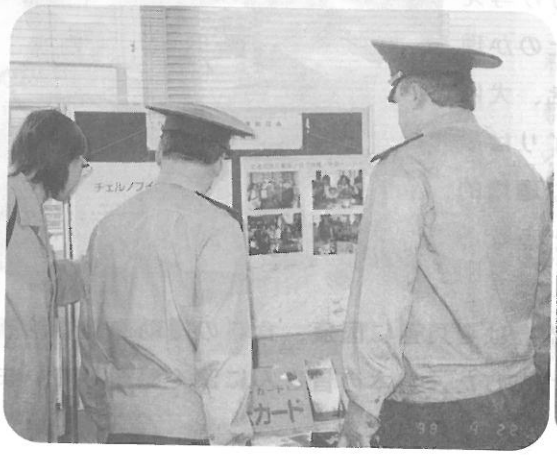
【⇧4/21には、岡崎のグループを訪れ、交流会を実施。写真は、4/12に同グループが中心となって、寄付された中古の消防服などの洗濯をしているところ】

ウクライナの消防士　アントニュークさん と トビャンスキーさん



【⇧ボランティア貯金を通じ、大変お世話になっている昭和郵便局を訪問(4/22)
⇩救援・中部の掲示を見つめる二人】

【⇧⇩名古屋テレビにも出演し、ニュースキャスターの浅沼さんや敦子さんと、なごやかに歓談する場面も（4/22）】



【⇧スケジュールの合間をぬって、講演会の案内状の郵送作業を手伝う。(4/23)】

【⇩浜松星美学園の先生や生徒との交流風景。浜松の講演会々場にて(4/29)】

支援を訴え、中部地方各地を駆け巡る！

【⇩伊那でのひととき。トビャンスキーさんは、日本滞在中、ビデオカメラを手放さなかった。「この旅は、同僚に知らせたい事であふれている。」(5/1)】

【⇧⇩一品持ち寄りで開いたさよならパーティーでは、アントニュークさん自らも料理の腕をふるい、参加者達に大好評。日ウの味覚の交流会となった。(5/1)】

【⇦日本の料理に、舌鼓を打つ二人。箸の使い方もすぐにマスターできた。(4/23)】

《移住基金からの親書》

１９９８年４月１８日
移住基金委員会は事故処理作業員代表団の訪問の機会に、チェルノブイリ救援・中部への親書を託します。

親愛なる友人の皆さん

私たちは皆さんのことを十分な根拠を持って、そのように呼びたいと思います。これは一般的な儀礼的な挨拶とはまったく違うものです。私たちの基金とあなた方の組織との協力の８年間は、二つの社会奉仕組織の間の友好関係と相互理解の輝かしい証拠を示しています。両者はこの間、外交官達が行なったことに比べて、はるかに大きなことを成し遂げました。

あなた方とあなた方の高邁な活動のおかげで、ウクライナからたいそう遠い日本が、我がヨーロッパの隣国よりはるかに身近で通じあえる国になりました。

私たちはこの親書を、チェルノブイリ事故１２周年の悲しい日にあなた方に手渡します。人によっては今ではもうこれらの年月は半ば忘れられた歴史です。しかし、私たちやあなた方にとって、原子力発電所の４号機は、致命的な放射線を発し続けています。チェルノブイリは永遠の痛みであり、不治の傷であり、瞳の中の苦しい涙ですが、あなた方全てへの、日本の偉大な市民の良き息子たち娘たちへの、私たちの大きな感謝の念でもあります。

当然のことながら、私たちはあなた方からの、途切れることのない援助と助力、医薬品や医療機器に感謝しています。しかし、本質的なことは、あなた方が被災者のために常時贈ってくださるお金や人道的援助物資の中にあるのではありません。本質的なことは、私たちの大いに困難で、今なお許し難い状況に対するあなた方の同情と深い理解の中にあるのです。ですから、どれほどの年月が経過しようと、どれほど様々な事件が起ころうと、現在及び未来の世代の我が国民の意識の中には、いつも日本が、その中部地方が、そこにあるあなた方の組織が生き続けることでしょう。

今、私たちは１９８６年の４月と５月に、自らの生命を代償にして、最も恐ろしい原子力の惨事から人類を救った人々の前に頭を垂れます。私たちはまた、広島や長崎の炎に焼かれた人々の前にも、自らの頭を垂れます。彼ら全てのことを永遠に記憶していますように！

私たちは、あなた方がこの親書を読みながら、私たちの心からの感謝の念と愛とを必ずや感じ取ってくださるものと希望しています。

どうもありがとう（日本語）、親愛なる友人の皆さん。

移住基金委員会　代表　　Ｂ．キリチャンスキー
秘書　　Ｅ．ドンチェヴァ

ちょっと新しい関係!?ーチェルノブイリ救援とマスコミ

その①．　あのＣＭで大人気、ウクライナのエレーナ・リアシェンコさん（長野五輪／フィギュア）も私たち「救援・中部」の呼びかけに応えて「日本の皆さん、チェルノブイリの被害者支援に協力をお願いします」と新聞を通じて訴えました。

その②．　あのジェームズ（ＺＩＰ・ＦＭ）からインタビューを受ける!!

４月２３日、真夜中の１１時半 自宅の電話が鳴って、なんとＺＩＰ・ＦＭのインタビュ-を受けてしまった。「チェルノブイリは今大変なんだそうですネェェー、でも電気も必要だしー、本当のところはどうなってんですかァァー？」なんとも元気の良い外人のお兄さんの口調に乗せられて、こちらもついついベランメェ調に。アントニュークさん達の講演会の時間と場所をしっかりしゃべってくれたのに感謝。翌日いろいろな人から「ＺＩＰ・ＦＭ聞いたよ！」と言われびっくり。こんなジャンルもあるんだ。（Ｋ）

長野冬季五輪のフィギュアスケートで華麗な演技を見せるウクライナのエレーナ・リアシェンコ選手＝2月20日、長野市のホワイトリング

事故から12年 チェルノブイリの悲劇 今も

長野五輪フィギュア選手のリアシェンコさん 支援訴え

《事務局便り》

アントニュークさんとトビャンスキーさんが帰国され、事務所は平常業務（？）に戻った静かな時間の中で、訪日時の多忙さと慌ただしさを思うが、それは、彼らの話を一人でも多くの人々に伝えるためのもので、充実した時であったなとつくづく感じられる。実際、講演会の参加者名簿には新しく出会った方々の氏名が連ねられている。事故から１２年経った今、チェルノブイリを新たに知り、思いを寄せる人々がいると言うことだ。心強い。

話は変わる。滞在中に彼らと１日だけ設けられた休日を楽しんだ。談笑の合間に語られた言葉が印象的であった。静かなティールームで休息したとき、アントニュークさんが「ここは静かでほっとする」とぽつりと言われた。「消防署にいると１日に１００本も電話がかかることがある。朝、昼の食事はほとんどとったことがない。かろうじて夕食は食べるが、帰るのは１１時半過ぎだ」。多くの困難さの中で暮らす消防士やその家族の「よろず相談」の全てが持ち込まれるという。あるときトビャンスキーさんがアントニュークさん入院の知らせを受けかけつけると、すでに彼は退院しようとしていたという。彼には待っているたくさんの人々と仕事があったということだ。そんな彼だが料理のこととなると話が弾み、生き生きとしてくる。お別れパーティでその腕を披露してくれた。エプロンをかけた彼の姿がいかにも「平和」であった。アントニュークさんはまた同じような事故があったら、人命を守るのが自分の仕事だから現場へ駆けつけるという。命を救うために命を失ってはならない。言うまでもないが、そんなことをしないですむことが最も大事だ。（山盛）

【苦悩】の中に【希望】を求めて・・・

1998年5月訪問記

神野　美知江

<ジトーミル州立小児病院にて>

彼らは、自分達の手で新しいプロジェクトを立案し、その夢を私達に熱く語った。『超音波診断装置が贈られた幾つかの地区病院と小児病院を、コンピューターによりネットワーク化して、医療体制の充実を図りたい』というもの。

（日本でも、小児の急性感染症を対象にした『結核・感染症サーベイランス事業』など、よく似たシステムがある。）

<ジトーミル市立小児病院にて>

この「超音波診断装置」で、毎日35～40人もの子ども達が診察を受けている。

甲状腺や腹部の腫瘍の早期発見により、救われる命は数限りない。

しかし、バシュク院長は、顔を曇らせてこう付け加えた。「診断に欠かせない『ゲル（ジェリー）』が買えないので、やむを得ず『ワセリン』を使っている。一事が万事、こんな調子だ。贈っていただいた粉ミルクは、涙が出るほど嬉しい。何か月か先の事を考えながら、使用期限を考慮して、少しずつ大切に使わせていただいている。」

日本で医師研修をしたザハルチュク医師・グメンチュク医師たちとの再会

活躍を始めた患者モニターセット

この装置が、粉ミルクとともにウクライナのオデッサ港に到着してから、彼らの手元に届くまでには、税関から運び出すための許可手数料として 136グリブナ（約1万円）、たびかさなる行政への書類提出、封印を解くための立会い検査など、まるで救援をはばもうとするかのような「政府との戦い」があった。

この春、「救援・中部」の贈った新しい装置が、多くの困難を乗り越えて、また子ども達の命を救い始めた。

粉ミルクと超音波診断装置を前にして

〈ナロジチ消防署にて〉

オレンジ色が、なぜかウクライナの若い消防士達に似合っていた。

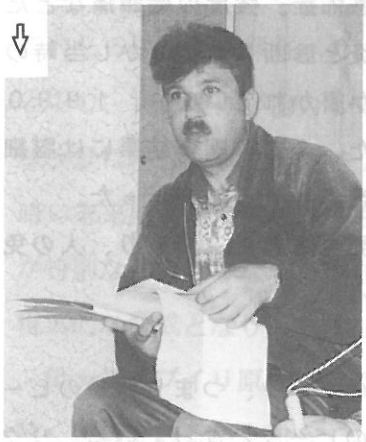
昨年の秋に贈った無線機は、消防車に常備され、威力を発揮しているとの事。しかし、消防服も無線機も、活躍する機会が多ければ多いほど、彼らにとっては、汚染地に出向く回数が多いという事を意味している。

⇧ 私達の支援金で、ドイツから購入した消防服

〈ナロジチ病院にて〉

ナロジチ地区保健所のフェーシェンコ所長の話

⇩



1986年から、食品や土壌の放射能測定を続けている。残念な事に、乳製品の中には、今だにひどく汚染されているものがある。持ち込まれた食品が、基準値（この基準値は、毎年見直しがあり、一定ではない）を越えていた場合は、「食べないように！」と指導している。しかし、破棄したか否かのチェックをしている訳ではない。

幼稚園や学校の給食に使用している食材は、放射能測定済みの汚染の少ないものを与えているが、家庭では両親の判断に任せざるを得ない。飢えを強要する事はできないからだ。測定した結果は、ここにすべてある。皆さんに役立つのであれば、持ち帰ってもらって構わない。

（1986年から1996年の食品汚染データをいただいてきた。また、後日ポレーシェ誌上で報告したい。）

ナロジチ病院院長コロミチュクさんの話

国に資金がないため、１月以降の給料が未払いのまま。行政は、住民をなだめる事で忙しい。チェルノブイリ被災者のための基金の予算を、１／３にするという決定が行われるらしい。

『最後に死ぬのは、希望である。』という言葉があるが、楽観主義にもかげりが見られるようになった。「救援・中部」の確かな援助は、私達の最後の希望である。

＊　＊　＊　＊　＊　＊　＊　＊　＊　＊

あの移住者たちの住むブルシロフ地区に、新しくブルシロフ地区病院の建設が始まった。（計画では１年後に完成というが、４～５年あるいはそれ以上かかる話なのかも知れない。）とにかく、工事が始まったのは確かだ。また、ゼレムリャ村でも、自分達の手で「水道と下水道」の工事をするための資金集めが進められている。

『針と糸があれば、布を縫う事はできる。』ウクライナは、まだ希望を捨てていないように見えた。『私達が夢を捨てなければ、まだ希望は死なない。』

帰りの機中で、ふとそんな事を考えていた。・・・

チェルノブイリのもう一つの衝撃（抜粋）・後編

－放射能は人間の心臓や血液だけでなく、脳細胞をも冒す－

ИЗВЕСТИЯ УКРАИНА
１９９７．１０．３付
『イズヴェスチャ・キエフ』発

ソコロフスカヤ・ヤニナ
（山崎タチアナ訳）

２．暗い遺産

現在、ウクライナで「チェルノブイリ白痴」を唯一研究している社会・法医学研究所の所長であり、精神科医長でもあるチェプリコフ氏はこう強調した。

「今まで脳細胞の萎縮を起こす、最低放射線量は不明だった。私が初めてリクイデーター（事故処理作業者）を診たのは１９８７年。当時我々は放射能が彼らにストレスや精神的ショックを与えるのではないかと考えていたが、脳神経細胞にとって放射能がこれほど危険なものであるとは、思いもしなかった。リクイデーター達の主訴は、今までの患者達とは異なり、記憶障害を訴えたり、失語症や痙攣、悪寒、死に対する恐怖症、強度の偏頭痛などだった。彼らの脳神経細胞は変化している。従来と異なる新型脳炎と診断した。しかし当時のリクイデーター達のカルテには原則として自律神経失調症としか書かれていない。１９９０年頃からやっと詳細な調査が始まり、衝撃的な結果が報告された。全ての調査結果には脳細胞の萎縮と脳皺の拡大が見られ、年々進行し、急速な老化現象を思わせる結果だった。

最近、学者達により放射能に冒された脳細胞の中に抗体が発見された。つまり、人の免疫細胞は、自らの脳細胞を異物と認識し、排除しようとしている」

３．放射能と自殺者

「チェルノブイリ事故以前は、精神病院では春と秋が患者のピーク、つまり自殺のピークだった。ところがチェルノブイリの地域では、夏がもう一つのピークとなっている。リクイデーターや周辺で放射能を浴びた人々は、暑くなると精神症状が出現する。ゾーンで働いた人々は一般の人々よりも２．５～３倍も自殺者が多い」

４．子供達が両親を憎むとき

夏になると、チェルノブイリのゾーンに、サマショールの孫や子供達が、森にある秘密の道を通って祖父母や親に会いに行く。子供達は森で自然に触れ、茸や木の実を取って遊ぶ。医師の診断によると、こうした子供達の脳は放射能に冒されている。そして事故後に生まれたリクイデーターの子供達の脳細胞もだ。彼らの中には、精神や知能に障害を持ち、普通に学習できない子供もいる。とても小さな子供でさえ偏頭痛に悩まされている。このような子供達は、なぜか特に父親を憎んでいる。精神科医師は「チェルノブイリはスラブ民族の生物学的な存在基盤を揺るがした」といっている。

「チェルノブイリ」は過ちを許さない。１１年経っても人間の脳細胞（知恵）を冒すと言う恐ろしい罰を与えている しかしグレヴァハの患者はそれを理解することはないだろう。（完）

インド、パキスタンの核実験に抗議する

・・・・・・・・・チェルノブイリ救援・中部・・・・・・・・

1998年5月11日以来、インドとパキスタンが行った核実験に私たちは大きな衝撃を受けました。この日、広島・長崎以来、核のない未来に向けて続けられてきた世界の人々の努力は一瞬にして踏みにじられたのです。これらの核実験が、既存の5つの核大国が速やかに核廃絶に踏み切らない事への抗議であるとか、お互いの軍事的脅威に対する対抗処置であるという両国政府の言い訳は、核のない平和な未来を求めて努力を続けている世界中の人々に何の説得力も持ちません。偏狭なナショナリズムと大国意識がどんなに世界の平和の実現にとって有害であったかは歴史の自ら証明するところです。

私たちは、インドとパキスタンの核実験が更なる疑心暗鬼を世界の他の国々にもたらし、これらの国々が核保有への誘惑に駆られることを恐れます。地球温暖化防止条約に見られるとおり、世界全体が協力して地球の未来を守らなければならない今、インドとパキスタンの核実験は再び1国の利益を人類の未来に優先させ、私たちを再び核競争の恐怖の中で暮らす暗い未来に引き戻す危険をもたらすものです。原子力発電が広く世界各国に普及し、核技術が特別な物で無くなった現在、今回の両国政府による核実験は、核拡散がいっそう具体的で現実的な脅威となり、危険な意図に対して何の歯止めも無くなったことを示しています。

チェルノブイリ原発事故の被災者の救援を続けてきた私たちは、放射能災害がいかに長く続く悲劇であるかを知っています。12年前の事故当時の被曝にとどまらず、今なお大地の汚染が消えず、森やそこで暮らす人々に新たな被曝をもたらし続けていることを思えば、いかなる形であれ核の悲劇を繰り返すことは許されないことです。私たちはインドとパキスタンの核実験場周辺の住民の被曝を懸念します。政治的目的のために、アメリカで、ソ連で、中国で、イギリスとフランスによる南太平洋での核実験で、繰り返されてきた住民の被曝が今また新たな国で繰り返された可能性に私たちは激しい怒りと悲しみを覚えます。

私たちは、インドとパキスタン両国の核実験に対して強く抗議するとともに、今後いかなる国も理性を持つ国家として、新たな核実験に手を染めないよう要請します。同時に、インド、パキスタンも含め他の5つの核大国が、地球上からの核廃絶のための具体的な手順を速やかに世界の人々に明示し、直ちに実行に移すよう訴えます。

1998年6月1日

チェルノブイリ救援・中部の収支報告（1997年4月から1998年3月まで）

収入の部

項目		金額(円)
前期繰越		8288833
救援寄付金	小計	9175632
(内訳)	個人	5988638
	団体	3186994
国際ボランティア貯金交付金		8344000
外務省援助金		6100000
運営費関連	小計	4601310
(内訳)	個人	1001310
	団体	3600000
物品売上等		419238
預金利子		18162
収入総額		36947175

支出の部

項目		金額(円)
救援物資関連		15722672
(内訳)	医療機器代	3365500
	医薬品代	6151137
	粉ミルク代	3394210
	無線通信システム・防火衣	1005942
	救急車	1400000
	輸送費	405883
特別事業費計		5193341
(内訳)	医師研修費	680626
	専門家派遣費	933674
	ナロジチ病院・暖房設備費	1800000
	移住基金支援費	577970
	トンチェヴァさん招待費	393647
	セルゲイ君支援費	45000
	ウクライナ訪問団経費	476520
	竹内氏滞在費	200672
	事故処理作業員招聘費	85232
運営費関連		4897356
(内訳)	郵送費・通信費	1026062
	電話代	511236
	印刷費	79273
	国内出張費	272545
	会場費	10950
	会場費	10114
	消耗品代	169691
	人件費	1638550
	家賃・光熱費	537519
	振込手数料	106645
	物品購入費	67200
	備品費	235196
	広告宣伝費	64600
	リース代(コピー機)	155974
	雑費	8301
	雑損	3500
小計		25813369
次期繰り越し		11133806
支出総額		36947175

※以上の通り報告します。　　チェルノブイリ救援・中部　会計担当：松田幸枝

※上記期間の収支報告書を監査した結果、異常なく正当に処理されている事を証明します。

会計監査：南 和也

編集後記

＊日本で研修を受けた医師達が、新しい医療システムを提案‥‥。診療所に水道をひくために資金集めに奔走‥‥。少しずつ自立の芽が育っている。（美）

＊『奪われし未来』『メス化する自然』は、蔓延する化学物質の生物に与える影響を教示。核実験による放射能拡散。絶望より怒りの抗議を！と自らを奮い起こす。（京）

＊私達のパンフレット『知ってください』に、ロシア語ヴァージョン登場！今回の訪問に持参した 100部は、大好評のうちに品切れ。たくさんの人々に出会えた。（J）

印刷所：“ぽらんてぃあ”勢文社（名古屋市中川区）